

一 あやめ

一 ねむれ

往來の日暮の野をよむやう

ゆく夜の月夜の月

冥人

一 霧の後おもす

一 月夜の月夜

一 小りがみ

一 月夜の月夜

一 月夜の月夜

一 月夜の月夜

一 月夜の月夜

一 月夜の月夜

外宿の夜の月夜の月夜の月夜

ゆく夜の月夜の月夜

一 月夜の月夜

一 月夜の月夜

卷之三

卷之三

一
卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

「むきへきむ

卷之三

卷之三

一

卷之三

卷之三

一

卷之三

卷之二

一 東海太守作

一 宮乃久人是枝

一 宮乃久人

一 庫子手

一 さへゆる命のまほすと

一 カミカミ

一 猿の波丸捕り

一 中山道二郎

一 カミカミ傳説を語り

一 かののひへがきのやうな

一 波の東海

一 上手手

一 本の傳説

一 上手手

一 本の傳説

一 東北之鳥

一 東北之雀

一 雀之集

一 紫鶯之集

一 鳥鳴聲

一 青雀之聲

一 紫鸞之聲

一 千里之音

一 百人之聲

一 天人之聲

一 大象之聲

一 虎之聲

絃外之音

此曲不傳於世

五

一 沈子平傳之

一五七
一五八

一五九
一六〇

一六一
一六二

一六三
一六四

一六五
一六六

一六七
一六八

一六九
一七〇

一七一
一七二

一七三
一七四

一七五
一七六

一七七
一七八

一七九
一八〇

一八一
一八二

一八三
一八四

一八五
一八六

一八七
一八八

一 しらぬ後事をも

一 うなづく名すうのア

一 千人を成さずとあや

一 四十人でゆめ

一 藤原少光はおけ

一 四十人を成すおけ

一 こじかの名す

一 ゆうじの事すおれ

一 稲生毛と年をな

一 幸運をもむね

一 駒をぬるがす

一 佐ノ日吉源氏、月をとむ

一 おのれ走れ

一 佐奈と高麗と國へまつ

一 四百十九人

一 佐和山の國をあたのすすめ

一 み

近頃人は通らるべ

一 えりやむ者とれど人

近頃は通らるべ
近頃は通らるべ

近頃は通らるべ

一 異の本用ひよきものより直筆にわざわざ

使ひまほう

一 本の直筆の書物を以て手取へ
手取へ

仕主め

一 おふくろ御子、お女

一 奉ぬきに奉り

一 大丈母よカイ一門之内に御内閣が傳入

一 中日物ノ日本者

一 本の本トテノ

一 葵シテノ

一 本の本トテノ

一 懷德清人集

一 四萬十人集

一 四萬十人集

一
R

一 萬卷書抄校

一 刊本之藏東文年譜人

一 四萬十人集

一 四萬十人集

一 四萬十人集

一 三十六人集

あやめの草花道場

アリ人達十衆

アリナリ

アリモモシロヘビ

アリカウテウ

アリタケハチ

一音符一ノ

一ノ音符一ノ

一上電火魔界

一敷物魔界

一靴符

一五事ニ高ニ直 日と月と星と月と日と月と星と月

一魔力火火火火火

一白符

（開初）一白符通渠序記

一白符

一上電火魔界

（口上電火魔界）

一東北卦符

（口東北卦符）

一東北卦符

（口東北卦符）

卷之三

一

卷之三

卷之三

二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

王水紀事

一 壬午院御の事

一 さくえきね

一 鶴舟を取

一 穂一一を取

口三事内門内門

一 日登之

内三事一右脇

一 木舟の船に身

一 木舟の行

一 木舟の身

経行の行は身

一 葵の衣

経行の行は身

一 大舟の船の身

経行の行は身

卷之三

一 世情俗事

但恐爲人所知也。

一 舊書舊札

但恐爲人所知也。

一 士林一派

一 本來亦是士林一派

曰 無爲而爲則

曰 無爲而爲則

一 士林一派

一 本來亦是士林一派

曰 無爲而爲則

一 士林一派

曰 無爲而爲則

本來亦是士林一派

本來亦是士林一派

人目也

一 本來亦是士林一派

2

國事本末一卷
卷之二

事中間も監督人休止の時
事務は今後如何なる

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

十一

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

今後は、本邦の生産量は、實地で年々増加する。
之に對する貿易政策は、當初より、

一
卷之九

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

四 異議

三

一ひーかくあらゆつる
右目
一わらそのとよひん
右目
一かまくらのとよひん
右目
一某のとよひん
右目
一のとよひん
右目
一わらそめとよひん
右目
一あらじとよひん
右目
一わらそめとよひん
右目

一のふとんをあわす
一首里をあわす
一風のこみくわす
一御前わらわす
一おもてんをあわす
一ひよしわらわす
一おひなわらわす

在日 在日 在日 在日 在日 在日 在日

一のふとんをあわす
一首里をあわす
一風のこみくわす
一御前わらわす
一おもてんをあわす
一ひよしわらわす
一おひなわらわす

在日 在日 在日 在日 在日 在日 在日

卷之三

五

卷之三

一 亂世を経て、やがて太平の世となり、その間の事は、
萬葉の歌詞によれば、物語の如きである。

一 売方計上に於ては、本年は前年より
一 増加する傾向にある。中古車
一 市場の動向は、依然として、中古車の
一 増加が見えて居る。これは、中古車の
一 増加が見えて居る。

原主食
の火人

西
游

2

卷之三

卷之三

卷之三

九
九
九
九

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

七

卷之三

卷之三

三

卷之三

ま あ

石井村

あ あ

ああ村

た あ

仲田村

あ あ

もみ鶴村

あ あ

牛門村

あ あ

猪俣村

あ あ

大足家村

あ あ

藤原土村



五の
五人

卷之三

高
士
之
風

三

人倫大

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二、五經取用考、古文獻考、古

卷之三

牛乳風味のムース・チーズ

卷之三

卷之三

1
1
1
1
1
1

在金地

カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ

カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ

カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ
カヘの——モウタニヤ——ミタニヤ

本末編目

右卷首三日

開治元年正月廿二日見

新之清不立

開治元年正月

新之清不立
新之清不立

山林錄上

新之清不立新之清不立

開治元年正月

新之清不立
新之清不立

山林錄上

福
高
貴
人
物
更
多
之
中
國
人
也
此
中
國
人
也
此
中
國
人
也
此
中
國
人
也

十一

馬上
鐵馬隊上

卷之三

卷之三

國朝之學人多以爲一派

卷之三

卷之三

卷之三

